

# 「までいな暮らし」実践に大きな1歩

## 県知事・高木美保さんが講演



▲集いでの対談の様子

『までいな暮らし』とともに考えるつどいは、12月6、7日の2日間、実行委員会（北原康子委員長）主催、村共催、県、福島大、各新聞社などの後援で行われ、参加者が「スローライフ」について理解を深めました。集いの初日は、村公民館で佐藤栄佐久県知事とタレントの高木美保さんが基調講演を行い、その



▲糸長助教授の司会で対談がすすめられました

後、村づくりアドバイザの糸長浩司日大助教授を司会に菅野村長を含めて対談が行われました。

講演では佐藤知事が「二十一世紀の価値観とスローライフ」、高木さんが「私のスローライフ」という題でそれぞれの考えを述べました。

対談では、佐藤知事が「結い」「助け合い」による共生の社会づくりが重要と話し、菅野村長は「手間ひまを惜しまず」「じっくり」などの意味で、これからは『までいな暮らし』がキーワードになる」と述べました。

この後、会場をきこりに移し参加者が「飯館牛肉」や「がにまきうどん」など、地元料理を味わいながら交流を深めました。

7日はきこりでシンポジウムが開かれ、始めに東京と群馬県上野村で二



▲7日のシンポジウム

重生活を送る、哲学者の内山節さんが自分の暮らしを紹介し、その後コネクターの糸長先生の司会で、内山さんに加え、辻信一明治学院大学教授、岩崎由美子福島大学助教授、村民代表の渡辺とみ子さんが意見を交わしました。

2日間の集いを通して得た成果をまとめた『までいな暮らし』宣言を、副実行委員長の北原繁さんが読み上げ、会場からの大きな拍手によって採択されました。



## 飯館流「百姓」の再生を

福島大学教授 岩崎由美子

今、5次総の地域産業部会で、住民と21世紀の産業振興、飯館らしい産業振興の部分を模索している。大企業誘致以外のやり方で、働き甲斐を感じながら所得が入ってくる仕組みを作れないかというのを考え、結局基本は「人と人のつながりだ」となった。

直売所が村外村内を問わず人々の「出会いの場」になり、生きがいや収入アップになっているといことから、商業にもその考えを打ち出し、どのお店にも「お休み処」という案が出た。

住民や観光客に、買い物をしなくても立ち寄って、地元の情報を聞けたり、会話を楽しめる場所を作ろうと考えた。そこから生み出されるお金は少ないが、当然としてきた終身雇用が変わるかもしれない時代、小さなものを数多くやって大きな所得につなげるという働き方によって変わる。その時「百姓」という言葉が意味を持つ。差別用語のような扱いを受けたこの言葉だが、もともとは農業に限らず多種多様な技能をもった人たちのこと。生きがいづくりと所得の向上のため、飯館流百姓を再生していく。そんな方向性を今度計画で導けないかと思っている。



## 未来はどちらに属しているか

明治学院大学教授 辻 信一

ベネズエラを訪れた時、最新鋭の技術を駆使した油田と、そこから車で1時間ばかりのところ、昔ながらの生活を営む先住民とのコントラストを目の当たりにした。彼らは時計で表される時間を信頼せず、自然の時間、潮の満ち干き、天体のうごきにしがって生きている。

ここで、双方に、ある古さを感じた。油田は最新鋭だが、過ぎ去った時代に執着し続けている。そして先住民の方々は、昔から営々と続けてきた暮らしの古めかしさを持っていた。

自らに問うが、いったい未来はどちら側に属しているのか。福島・飯館でも同じ構図があるといえる。一方では世界最大級の原発。一方で「まδειな暮らし」を提唱する飯館村。そしてここでも、いったい未来はどちら側に属しているのか。

本当の意味での新しさ、そしてこれまで社会が追求してきた豊かさとは違う豊かさを村の人たちは追及しているのではないかと思う。

## スローに暮らすとは?

今までは、都会に追いつけという施策をやってきたが満足できるものではなかった。今、農村の暮らしが見直され、癒しが求められる時代がやってきた。

そこに、食文化をキーワードとした、村内外の人たちとの交流があるのではないかと思う。今あるものを生かしたむらづくり。まつりのある風景を大事にしたり、見て、食べて、交わって楽しい空間、五感に訴える暮らしをつくるのが大事だと思う。

それと「こんころもちのある生活」。心根のよい、人と人のつながりを大事にする「飯館こんころもち塾」の創設やみんなの知恵づくりで、一人ひとりの得意分野を生かせるネットワークづくりをする。最後は人づくり。お互いに癒される存在になればいいと思う。

おとめかい

私の10年後の理想。「老止会」から脱却したグリーンツーリズムの会、仲間たちと「こんころもち」の精神で交流人口を増やしたい

そして、さらにお互いに認め合い、生かしたい、高めあう夫婦を基本としてずっと夢を描き続けたい。

## 「こんころもち」の気持ちで

住民代表 渡辺とみ子



## シンポジウムから

(内容の一部を要約したものです)

20世紀という時代は、「明日は、今日よりもよくなるぞ」という1つの前提によって生きてきた。収入、生産量、消費量全てについて。だが、考えはいつの時代も同じではない。例えば昔「山」は生き物が生きる場所でありながら、死んでいく場所と考えられていた。人間が死ぬと近くの山に魂が行くと考えられ、生前に汚れた魂をキレイにして祖霊になる。そういう考え方を強く持ってきた。

「まち」というのは、人が生きていく場所でありながら死んでいく場所である。村にいれば、人々が死んでいく場所というのが見えるが、それを消してしまった都市部の衰退が見えてきている。生きている人間の活力だけの場所にしていく方がいいことだと思っている。僕たちが楽しく生きていくときに地域の技術や文化、ものの考え方、それを大事にしながらこれからを考える。そこには必ず生の世界を支えている死者の時間があつたということをもう一度考えなければならぬ。そのあたりに22世紀の窓口があるような気がする。

## 22世紀の窓口

哲学者 内山 節

